

ユハニ・アホ「帆を乾かす」とミンナ・カント「その時、なにが起きていたのか」

十九世紀フィンランドの「男性」と「女性」の日常を描いた二つの物語

柴山由理子

本稿では、十九世紀を代表するフィンランドの作家ユハニ・アホ (Juhani Aho, 1861-1921) とミンナ・カント (Minna Canth, 1844-1897) の短編を紹介する。二人は、アレクシス・キヴィ (Aleksis Kivi, 1834-1872) と並びロシア帝国大公国時代に、フィンランド語で執筆し、フィンランド文学の興隆・発展に大きく寄与した重要な作家である。

ミンナ・カントは一八四四年、タンペレに生まれた。ジャーナリストとしての経験を持ち、夫との死別により三十代でシングルマザーになった後、クオピオに移り実家の事業を継ぎながら本格的に執筆活動を開始した。代表作として、『労働者の妻』(一八八五)、『牧師の家族』(一八九一)、『アンナ・リーサ』(一八九五)の三大戯曲作品が挙げられる。エミール・ゾラやヘンリック・イブセンの影響を強く受けた作家としても知られ (Majjala 2019, 柴山 2025)、フィンランドにおける女性の立場向上に大きく貢献した。一八九七年に五十三歳のときに病気で亡くなる。

ユハニ・アホは一八六一年にラビンラハティで誕生した。『鉄道』

(一八八四)でデビューを果たし、その他、『牧師の娘』(一八八五)、『ユハ』(一九一一)などの代表作がある。カントと同様にジャーナリストとしてのキャリアも持つ。作家として長年活躍し、写実主義、自然主義、新ロマン主義など、時代の影響を受けながら文体やテーマにも変化が見られた。

二人は、同時代の作家として交流があり、共通の友人知人も多くいた。カントは自宅で「ミンナのサロン」を開催し、アホも訪れていた。二人の書簡のやり取りも残っている (SKS 1986)。

今回取り上げるのは、二人の短編小説である。アホが男性の結婚生活をテーマとして書いた「帆を乾かす」(一八九一)に呼応してカントが女性の立場で「その時、なにが起きていたのか」を新聞に発表した。その後同作品は短編集におさめられた。イブセンの影響もうかがえ、女性の立場から、批判的なメッセージを投げかけた。この時代のフィンランド文学の一部を示すとともに、フェミニズムの論評としてもカントの作品を読むことができる。

まず、ユハニ・アホの「帆を乾かす」を、そして次にミンナ・カ

ントの「その時、なにが起きていたのか」の翻訳を紹介し、最後に簡単な解説を記す。いずれの作品も日本語では初めての訳出となる。

ユハニ・アホ「帆を乾かす」

Juhani Aho, Purjeita Kuivamassa,
Lastuja I, WSOY, 1891

私たち、二人の若き既婚の男たちは、夏の別荘のペランダに腰かけていた。たつぷり昼寝をしたあと、いまはコーヒーを味わい、煙草を吸いながら、強い南風が吹き続け、水面が深い青色に染まった湖を眺めている。

「ちようどいい風が吹いているね。」と友人が言い、私も同感だと伝えた。

とはいえ、私たちは決していい気分ではなかった。隣同士に座って、黙りこんでいた。二人ともただただ気難しい面もちで、尾根の向こうに見える小さな町の白い浜辺のレストランを眺め、ふたたび視線を自分たちの小型の帆船へと戻した。船は近くの岸辺の波間で揺られながら、所在なさに錨のロープを引つ張っていた。私たちは船を共同で所有していた。一緒に組み立て、自分たちで塗装し、帆を張ったのだ。去年の冬、グラスを傾けながら夜な夜な船作りについて語り明かしたのは、もっとも楽しい出来事で、春の間はずっと作業に打ち込んでいた。夏の間はずっと、いい風が吹くことばかり考えていて、今もまた同じ考えが頭をよぎったのだ。

しかし同時に思うことは、私たちは二人とも残念ながら結婚して

いて、若くて美しい妻がいるということだった。妻たちは私たちを「限りなく」愛してくれているが、私たちの船のことは愛してくれないのだった。妻たちはことあるごとに船にけちをつけ、私たちが船について話すときとあくびをし始めた。また、すぐに話をやめないと、とげとげしく、意地悪くふるまい、夫のつまらない情熱をなじるのだった。妻の気持ちに寄り添わなければ、機嫌を損ねてそれぞれ森に出かけていってしまった。彼女たちをなだめようにも、妻のことはどうでもよくて、見て見ぬふりをしていて、一緒にいても退屈しているのではないか、それなら、愛していかないのになぜ結婚したのかと私たちを責め立てるのだった。

「そんな子どもみたいなことを言わないでくれ、私の愛しい人よ。…」

「やめて！ほうっておいて…さつさと湖に出ればいいじゃない…引き止めたくないの…。さあ、すぐに行って、あなたの友達もそわそわしてるじゃない。」

「君が望んでいないなら、行かないよ。」

「でも、行ってほしいの…だって、せつかくのいい風がまた無駄になっちゃうじゃない。」

「だったら、君も一緒に来たらいいじゃないか！」

「いやよ！男同士で船に乗りに行く方が楽しいって、あなたの目を見れば分かるし、声からもはっきり伝わってくるわ…私たちはじやまになるだけよ。」

船が好きでも妻のことも愛しているのだと妻を納得させることがどうしてもできなかった。船なんてどうでもいいんだと誓い、キスをして言い聞かせなくてはならなかった。けれどもし、友人がどう

しても行きたいと言い張れば、その時は行くしかないだろう。

友人も私と同じ約束をしたに違いない、というのも、私たちはどちらもこの一週間一度も外出していなかったからだ。毎日妻とともにベリーを摘みに行き、畑の柵の後ろでコーヒー休憩をとり、ガゼボに座って妻たちに朗読をしていた。

妻たちは幸せそうで、満ち足りた表情をして、私たちのために甘いお菓子を作ってくれた。しかし、私たちのほうは、だんだん憂鬱になっていき、いわれない苦しみを感じて退屈し、落ち込んで、一言も交わさず黙って座っていたのだった。

風は心地よく穏やかで、船はあまりにも魅力的で、出航したくてたまらなかつた。けれど、私たちは船を出すなど思いつきもしなかつた。いつか、もしかしたら、ずつと先の将来に、私たちがもう「永遠に」愛されなくなったら自由を取り戻せるかもしれない。この夏もしかしたら偶然、こっそりと、妻たちがどこかに出かけているとき以外には…。

給仕がそばに来たとき、コーヒーと一緒にコニャックを頼んで酔っ払い、本心話をしてみようかという強い決意が芽生えた。きつとカラフェの底には、強い意志が存在しているはずだと。ところが、そう思ったその時、友人が給仕にぶつきらぼうな声でこう尋ねた。

「妻たちはどこだ？」

「奥様たちはベリー摘みに行き、すぐに戻ってくるとお二方にお伝えするようおっしゃっていました。」

「すぐに、つてどれぐらいだ？」

「奥様たちは、すぐに、とだけしかおっしゃっていませんでした。」

「コーヒーを片付けてくれ。」

私はコニャックを頼むという思いつきを諦めた。妻たちがガゼボに座って私たちを待っていると思つたのだ。朗読のために。

「今朝雨が降つたあと、君は帆を乾かしていいよなあ？」

と、不意に、友人がくぐもつた声でつぶやいた。

「乾かしていいよ。」

「今日、何か特別にやらなくちゃいけないことはあるかい？」

「特に何も。どうしてだい？」

「いや、一緒に少し湖をまわれるんじゃないかとふと思いついてさ。」

つまり、彼が先に言い始めたのだ。彼と一緒にいきたいのなら行かなければならぬだろうと私はつぶね言っていた。

「もし一緒にというのなら、僕も行くよ。」

「もし、君も興味があるんだつたら？」

「もちろん、それは喜んで。」

なんと悪い奴だ。これで彼の逃げ道も確保された、つまり彼もまた友人が行きたかつたからと言いついでできるだろう。

「じゃあ、行くんだつたらすぐに出かけようか…。」

「いまずぐ準備するよ。」

二人とも頭の中では考えながらも、それを口には出さずにふるまつた。だが、私たちが準備する様子に使用人は気が付いた。友人は数箱のマツチ箱をポケットに入れ、私のポケットは煙草で膨らんでいて、二人とも上着を腕にかけていた。使用人は私たちの背後の台所の扉から声を掛けてきた。

「お二方は長く湖にいらつしやるのでしょうか、奥様方にはなんとお伝えすれば良いでしょうか？」

「妻たちには、今朝雨が降つたので帆を乾かしに行かなければな

らなかつたと伝えてくれ。」

もし私たちに後ろめたさがあったとしたら、岸まで走っていっただろう。手漕ぎボートはまるで矢のように軌道から外れて水中に飛び込み、一押しで船尾に横付けされた。

帆を上げる喜びはなんと大きかったことか。スループ船のきしむ音が、なんと甘美な旋律に聞こえたことか。友人がどれほど熱心に船から水を汲み捨て、どれほど素早く帆綱を穴に押し込んだことか。そして、ついに自由になったという喜びで、私たちは息もできないほどだった。私がようやくやく湖に足を踏み入れた時、彼の舵を握る手が震えていた。

我々が岸を離れる前に、妻たちが帰ってこなければ！でも、もしも今妻たちが戻ってきたとしても、気づかなかつたと言うだろう。もし妻たちが庭から大声で叫んだとしてもー私たちの準備が整うまでに岸にたどり着く時間はないはずだ。波が岩に打ち寄る轟音にかき消され、何も聞こえなかつたと言いつつ……。

結局、誰も来ず、誰も叫びはしなかつた。私たちは帆を広げ、錨を上げ、帆をまつすぐ町の方角に向けて、自由に外の世界に出かけていった。

一時間遅れたとしても、一時間でそこに着いて、二時間で戻ってくる。

示し合わせたわけではなかつたが、交代で舵をとるときに、二人とも方向を変えはしない。

岸辺のレストランで流している音楽がすでに船にも聞こえてくる。その裏側には、私たちの小さな別荘があるはずだ。

帆はとつくの昔に乾いていたーたとえ濡れていたとしても、慌て

て出発したので気にも留めなかつた。

ふと、私たちの旅がすでに半分以上過ぎていることに気づいた。長い時を経て、またしても若い独身男性に戻つたのだ。妻のことなどすっかり忘れ、心配事も消え失せていた。そして、何も考えずに、暗黙の了解に従って、浜辺のレストランへと一直線に向かい、橋の脇で優雅に方向転換する……そして翌朝までそこで帆を乾かし、夜明けとともにー漕ぎだしてー帰路につくのだ。

ミンナ・カント「その時、なにが起きていたのか」

Minna Cantu, Mutta Mitäs tapahui,

Uusi Kuvalehti, 1891/

Novelleja II, Otava, 1892²

「ユハニ・アホ著『削りくず (Latuja)』に収録されている物語「帆を乾かす Purjeita kuivamassa」に基づく。」

男たちが帆を乾かしている間に、一体、私たち女性には何が起こっていたのか？

私たちはちようどベリー摘みに出かけたばかりで、二人とも手に小さな白樺のかごを持っていた。ベリー摘みしながら話ができるように、近寄って立っていた。

「ねえ、アイナ、男の人がよく家に、それから……それから、あの

…妻にも飽きたりするのなんですか？ もちろんエーロのことではなくて。彼は一度もそんな風に思ったことはないだろうし、彼の心配をする必要もないけれど、ほかの多くの人にこの心配が当てはまると思ったの。」と友人が声を掛けてきた。

「私もよ。ヴォルマルと何度もこの話をしたけれど、彼はそんなことはないと言っているわ。彼自身がそんな状況になったことがないから、他の人にも起こりえないって。」

「いまベリーを摘みながら、私が何を考えていたか分かる？」
「えっ、なに？」

私たちは立ち止まった。彼女は私の腕に手を添えた。

「その変わらないという確かさがきつと彼らを退屈させているのよ。妻は夫とつてありふれた平凡な存在になって、妻に何の価値も見出せなくなってしまう。いつも同じ食卓についていたら、食事にどんな喜びを見出せるかしら？けれど、しばらく食卓から離れたら、空腹になって、そうしたら…。」

「確かに！あなたの言う通りね。」

事態は明らかだった。もつと早く気づけなかったのが不思議でなかった。

「だったら、このまま森に留まりましょう。彼らを待たせて、どんな反応があるか見てみるのはどう？リスクは早めに取り除くのが賢いやり方よね。といっても、ヴォルマルとの関係は心配してないんだけど。」

「ええ、私もエーロの心配はしてないわ。でも、とりあえず、変化をつけるために、手間暇をかけずにできるわね。」

私たちは手をつないで歩いた。茂みには見事にたくさんのが実

っていた。私たちの姿が見えなくなったら、ペランダに座っている夫たちが何を言い出すだろうか、笑いながら想像を膨らませた。

「もしかしたら私たちが道に迷って、パニックになっているんじゃないかと思うとか？」

どれぐらいここに留まったらよいものなのか私には分からなかった。でもエンミはこれが危ない思い付きだとまったく思っていないかった。

「しばらく恐怖を感じさせておけばいいのよ、問題ないわ。」

そして、彼らの元に私たちが戻れば、夫の喜びはより大きなものになるだろう。

思いがけず、まっすぐで平坦な道に出た。遠くにぶ厚い土埃が舞っているのが見え、そこから荷馬車が徐々に姿を現し始めた。馬車はほとんど近づいてきて、馬の姿も見分けられるようになった。

「ヴェイヨラ家の馬車ね。サンニが義理の兄弟と一緒にラウタランニから戻ってきたんだわ。」とエンミは言った。

「ラウタランニに行つてたの？オットも？」

「知らなかったの？もう一週間も前に出発したのよ…。」

「そうだったの！」

「あなたたち、最近はまだ一緒にいないようね。前はあんなに仲が良かったのに。」

「ええ、今もそうなんだけど…ヴォルマルとオットはお互い一緒にいるのがあまり好きではないみたいで…。」

「それは不思議ね。エーロはヴェイヨラさんのことをとても好ましく思っているみたいよ。」

話している間に馬車が近づいてきた。私たちを見つけて、止まっ

た。オットが馬車から飛び降りてきた。

「アイナじゃないか！君に会うのはいつぶりだろう！」

彼は昔と同じように、気さくに、そして明るく握手をしてくれた。私たちは幼なじみで、良い友人だったのに、理由は定かではないが結婚してからは少し疎遠になっていた。

いや、正直に言うと、言おうと思えば、理由は明らかで、ヴォルマルは嫉妬して、オットと私が一緒にいるのを見るのが耐えられないのだ。それだけのことだ。ヴォルマルがいる前では、オットに対して自由に、自然にふるまうことはまったくできなかった。ヴォルマルのじつとりとした視線が私を煩わせた。でも今は、少なくとも古くからの良き友人らしく親しみを込めて彼に挨拶した。かつての友人のことを決して忘れていないと示したかったのだ。

「二人はどこに向かっているの？」馬車からサンニが尋ねた。

「どこにも。あの森でベリーを摘んでいるだけで。差し上げましょうか？」

「馬車に乗って私たちと一緒に来てくだされば、ラウタランミの話を二人にできるのに。」

「行こうよ！」オットも促し、彼の目には、昔と変わらない深い愛情が浮かんでいた。

「でも、エーロとヴォルマルは何と言うかしら？」

私はエンミを見た。彼女も少し戸惑っていた。

「二人も後から来ればいいじゃない。」とサンニは言った。「ヘイツキに伝言を頼んで、オットが馬車を御すればいいわ。」

「なるほど。そうね。」

「エンミ、どう思う？」

「行きましょう！」

オットは私たちを馬車に乗せ、自分は御者席に乗り込んだ。ヘイツキは道に残った。

「ヘイツキ、夜寒くなるかもしれないから、私たちの上着を持ってきて、と伝えて。」と私は振り向きながら叫んだ。

そして、私たちは出発した。瞬く間に木々が前を通り過ぎて、野原や牧草地は背後に広がり、目の前には新たな景色が現れた。オットは運転に慣れていて、彼が手綱を握ると安定感があって座り心地が良かった。彼のまっすぐで細身の体には、エネルギーと力強さが宿っていた。太り始めていたヴォルマルよりも、オットの方がずっと良い体つきだった。よく、お酒を飲むとおなかに肉がつくと言われているから、ヴォルマルには食事中に飲むことを禁じようと思っ

た。

私たちは坂を上っていった。オットは馬を歩かせた。

「アイナ、覚えてる？」オットは振り返って私を見た。「一緒にあそこの干し草小屋で雨宿りをしたときのことを、覚えてる？」

「ええ、覚えてないわけじゃないでしょう。あの頃、私たち、まるで小さな子どものように何もできなかったわね。」

「そして幸せだった！ねえ勇気を出して…。」

「もう、静かにして。」

「教えて、教えて。アイナは一体何をしたの？」とエンミは大きな声を出した。

「オット、話しちゃだめ。許さないわ。」

「だっていつても、どうってことない話じゃないか。」

「そうけど…。」

「アイナ、君は子どもっぽいなだね？」

「私、実はその話を知ってるの。」とサンニは笑った。「ドレスシューズを履いていたあなたを、雨上がりの濡れた牧草地でオットが抱き上げて歩かなければならなかったんでしょう。」

「ねえ、オット、秘密にするって約束したでしょ。」

「俺は無実だよ。サンニの使用人がたまたま見えていて、それだけのことだったから…。」

「だとしても。私は知られたくなかった…。」

「いいじゃない、アイナ、あなたってほんと幼稚なんだから！」
サンニとエンミが笑い出し、私もすぐに彼女たちに加わった。ヴ

オルマルにまだこの出来事を話していなかったのが少し気になった。今夜、他の人たちから話を聞くことになる前に話そうと思った。

私たちには他にもたくさんさんの共通の思い出があり、話し始めてすぐにエンミとサンニにひとつ思い出話をした。二人ともとても面白がっていた。オットは、昔とても陽気で、突拍子もないいたずらをたくさん仕掛け、私もたいてい一緒にやらされていた。サンニにも何度もいたずらをして、今になってようやくそのことを打ち明けたのだ。彼女は何度も私たちのことを疑っていた。例えば、サンニの名前の日に受け取ったお祝いのカードに書かれていた詩のことで、そのおもしろおかしい内容に皆で笑い転げたのだが、私たち二人はしらを切りとおした。どうやっても白状させられず、ついにサンニは行政官が詩の作者であると信じてしまった。そして、いたずらっ子のオットは、行政官をあつと言わせる返答の詩を書いてみようと言い出したのだ。そして、その詩をサンニがクリスマススイブに秘密裡に届けた。

私たちは一緒にたくさんさんの楽しい時間を過ごした。たくさん？いえ、数え切れないほど。そして、一緒にいて決して退屈することはなく、おしゃべりが止むこともなかった。ヴォルマルともそうあってほしいと願うぐらいい。一体何が原因なのだろうか？私が年のせいで退屈になったのか、それともヴォルマルがオットよりも頑固な性格だからか？いや、そんなことは到底信じられない。きっと私のせいにちがいない。

家に着くと、オットはバイオリンを取り出し、私をちらりと見てチューニングを始めた。私はすぐにピアノに向かい、ラの音を弾いた。そして演奏が始まった。私のお気に入りの曲の「ロマの人びと」、「音楽が鳴り始め、もの哀しい歌を歌う」、「心の涙」、「いつか私たちも」など、かつて一緒に弾いた曲を次々と演奏していった。私はすっかり夢中になって、あの日ほど演奏を楽しんだことはなかった。私はどうだろう。でも、それは決して不思議なことではなかった。家でも長い間ピアノを弾いていなかったのだから。ヴォルマルは音楽が好きではなく、私が演奏を始めるとビリビリするので、どんなに弾きたくても演奏を諦めざるをえなかった。

一方、オットは音楽的な才能を強く持っていた。非常に正確な耳を持っていてのと同じように、とても感情豊かに演奏し、私は何度も涙を流した。

演奏しているうちに、あつという間に時間が過ぎ、ヘイッキがもう戻ってきたかどうか、夫たちが何て言ったのか尋ねることさえ忘れていた。サンニがようやく、ヘイッキがあつ道で迷ったのではないかと始めた。エーロとヴォルマルからも連絡がない。もう到着していてもおかしくないのに…。

そして私たちはヘイッキが帰ってきたのを同時に見つけ、彼に走り寄っていった。

男たちは家におらず、船旅に出ているとヘイッキは言った。使用人に、すぐに婦人たちの上着を持って来るように伝言したと。

船旅に出かけた？

妻を連れて行かずに？妻たちが森から戻るのを待ちきれず、私たちを残して二人で出かけたのだ。たとえそれがちよつとの間だけだとしても…。

私たちは、伝言を手配しすぐに二人も来るよう伝えようとしたというのに。もしそうしていなければ、私たちは出発していなかっただろう。しかし彼らは…！それどころか、私たちが家を離れた瞬間に、まるで私たちが逃げられるのが嬉しかったかのように、いそいそと出発したのだ。

エンミと私は顔を見合わせた。二人とも同じことを考えていたのだと思う。そして、森で話したばかりのことを思い出していた。二人とも気後れして言葉が出てこなかった。居間に戻りソファに黙って座った。サンニとオットがまた私たちを元気づけようとしてくれた。

「彼らはすぐに戻ってくるよ。二人に言わずに出かけたんだから。もしかしたら、もうすぐそこに来ているかもしれないよ。」とオットは言った。

「いずれにしても、二人を待ちましょう。その間にお茶を飲んで、後で夕食を食べましょう。」とサンニは提案した。

皆、その意見に同意した。オットは話題を変え、イプセンの最新作『ヘッダ・ガーブレル』を読んだかと尋ねてきた。私は恥ずかし

くなった。そんなものが出版されているなんて知らなかった。夫たちは新聞を共有していて、ヴォルマルは、読み終えた新聞をエーロにいつもすぐに渡してしまうので、私には読む隙がなかった。ヴォルマルはたいしたことは書いていなかったと私にいつも言っていた。彼は空想の世界の小説にそれほど興味を持っていなかった。小説のたぐいはすべて、女や若者が読むものだと言っていた。大人の男にはちゃんとした仕事があるのだから、そんなくだらないことに時間を使っている暇はないんだと彼は言った。

「でも、オットだって大人だけれど、とても熱心に文学を追いかけているじゃない。」とかつて私は彼に伝えてみたことがある。

「なんで彼の話がここで出てくるんだ？」とヴォルマルは答えた。

「彼はろくでなしなんだよ。」

テーブルには『ヘッダ・ガーブレル』が置いてあった。オットはその中から数節を読み上げ、あらすじを説明してくれた。イプセンがこの新作で何を意図していたのか、オットは、浅薄で未熟な読者であれば気づかずに読み飛ばしてしまうようなささいな箇所について、深く広大な真実をいくつも引き出してくれ、私たちはとても考えさせられた。彼の説明を聞くのは本当に楽しかった。エンミと私は興奮しすぎて、その前の不満もすっかり忘れてしまっていた。オットは私に『ヘッダ・ガーブレル』を貸すと行ってきて、私が彼と同じように作品を解釈するかどうか感想を聞きたがった。

彼は、オットは、知らないのだ、私がどれほどすべてにおいて退行してしまっているか。時は私の前を通り過ぎ、もはや偉大な師についてまったく理解できないのではないかという疑念が浮かんだ。

しかし、家の完全な静けさの中でその本を読みたいという強い願

望を抱いたので、わざわざ彼にその疑念は伝えずに、喜んで申し出を受け入れた。

楽しい時間が過ぎていった。ときに真面目な話をし、ときに冗談を言い、笑い合った。そしてまた一緒に演奏し、全員で声を合わせて歌った。

喜びが最高潮に達していたその時、使用人がドアのところにサニを呼び寄せ、耳元で何かをささやいた。

「ねえ、聞いてください、愛する友人たち。」と彼女は私たちの方を向いて言った。

「もうこれ以上待てないわ。そうでないと料理が冷めてしまうもの。」

オットは時計を見た。

「もう〇時だ。」

「こんな時間なのに、彼らは来なかったのね。」とエンミは言った。

「どうする、アイナ？ 私たち、上着も馬もないのに。」

「二人とも今夜はここに泊まっていて。朝になったらオットが家まで送っていくから。」

私たちは承諾した。早く出発するという条件付きで。

「八時には馬具をつけるよ。」とオットは保証した。

そして彼は約束を守った。朝ちようどコーヒーを飲んでいると、

入口の階段の前に馬車がやってきた。私たちは急いで別れを告げた。

正直に言うと、私はもうヴォルマルが恋しくなっていたし、エンミもエーロが恋しかったのではないかと思う。

太陽が輝き、鳥たちは歌い、森には緑が生い茂り、私たちは元気いっぱい幸せだった。特にエンミと私は競うように笑って話をし

た。その時オットは、馬があまりにも猛スピードで走るの、意識を馬に集中させて、そのペースを抑えるのに必死だった。

三十分で旅は終わり、私たちはギャロットで庭に向かった。

私は窓を見上げた。誰も見えなかった。ヴォルマルはまだ寝ているのだろうかと思った。

もう、まったくヴォルマルったら、私がいなくてもすやすやとそんなに長く眠っているなんて！ 怒りが徐々にこみ上げてきたそのとき、マリアがいそいそと台所の扉から出てきた。

「ああ、奥様方、お帰りになったんですね。旦那様たちはまだ帆を乾かしているところですよ。」

「なんてこと……！」

湖から船が近づいてくる気配がしたので、慌てる暇もなかった。三人とも岸に駆け寄っていった。

彼らだ！そこに夫たちがいて、二人ともなんとか無事に船を漕いでいたが、かわいそうに、帆はひどく損傷していた。漕ぐのが大変だったに違いない。オールはなんとか上下していて、私たちがハンカチを振り回して、長い間明るい声で励ましたのにもかかわらず、夫たちはにこりともしていないようだった。

「どこまで行ってきたの？ 私たちがヴェイヨラ家でどれだけ楽しんだか信じられないでしょうね。ちようどさつき戻ってきたところで、昨日の夜、あなたたちが夕食にやって来るのを待っていたのよ。」

「そして、ヴェイヨラさんは私たちの面倒をとめてよく見てくれて、朝早く起きて馬車で家まで送ってくれたんだから……。」

「そんなことどうでも良いじゃないですか、エンミさん」オットが口を挟んだ。

エーロとヴォルマルが船を片付けている間、私たちは話をして
いた。

かわいそうな人たち……。彼らはひどく疲れていて、棧橋に上が
てこちらを向いたときに私たちはやっとそのことに気づいたのだっ
た。顔は青白くやつれていて、髪は乱れ、髭は剃られていなかった。
こんなヴォルマルを見たのは初めてだった。

「見た目はくすみ、心はくもり、そう思わない？」とエンミは言
った。

「全力で漕がなければならなかったんだ。」とエンミの夫はつぶや
いた。

ヴォルマルはオットに冷たく挨拶し、脇に退こうとした。しかし
私は夫を追いかけて行って、腕を掴んだ。

「あなたはただの怒りんぼうだね！」

解説

ユハニ・アホは、生涯に多くの作品を残した。長編のほか、短編
にも定評があり、一八九一年から一九二二年の間に八巻におよぶ短
編集が出版された。短編集のタイトルは木屑やおがくずを意味する
Lastuja で日常の些細な出来事やまわりの風景から人生の真実や美
しさを描き出している。特に農民や農村の生活から焦点をあて、湖水
地方の素朴な生活や自然を描いた作品が多い。静謐で詩的な文章が
アホの持ち味といえる。「帆を乾かす」は最初の短編集に掲載された
初期の短編作品である。同作でも、二人の若い夫婦が主人公で、特

に男性の心情が湖や船の情景の描写と相まって巧みに描かれている。
日常生活や結婚の倦怠感、妻への遠慮、船と自由への渴望と憧憬、
巧みな心の動きが見事に表現されている。

この作品を基に、同時代の作家ミンナ・カントが短編「その時、
なにが起きていたのか」で皮肉まじりに女性の立場からの物語を痛
快に示した。アホ、そして男性への挑戦ともいえよう。当初、この
作品は東部フィンランドの新聞である「ウーシ・クヴァアレヘティ
(Uusi Kuvalehti)」に掲載されたそうで、顔をしかめる人、拍手喝
采を送る人など、多くの読者の関心を引き付けたことであろう。大
胆なタイトルからも挑発的な意図が読み取れる。同作はその後、「短
編集Ⅱ (Novellija II)」(一九九二)に収録された。

アホの作品の世界から打って変わって、カントの作品では登場人
物がそれぞれ名前を持ち、より生き生きと物語が動き出す。アホの
作品はより象徴的で、心理描写が中心だったのに対し、カントの作
品では物語がより現実世界に落とし込まれている。登場人物の活発
な会話のやり取りも特徴的である。カントはリアリズムの手法を踏
襲した作家だった。戯曲を得意とし、十九世紀、フィンランド語の
劇場ができた始めた時代の売れっ子の劇作家でもあった。作品が書か
れた一八九一年は、カントの作家人生の後期にあたる。

この作品で、カントは、夫(男性)が考える妻(女性)と現実の
違いを示した。女性の実際の考えを語らせることでステレオタイプ
を覆し、さらに妻が夫へ向ける目や本心の描写、アホの作品には出
てこなかった男女の対照的な結末には皮肉が込められている。

アホが描いた男たちが船や自由に飢えていたのに対して、カント
が示した妻たちは気兼ねないおしゃべり、音楽、そして文学にも飢

えていたことも示し、結婚による女性の犠牲や不満を示している。カントは、女性の置かれた立場や苦しみを書くことで社会に問題提起し続けた作家である。本作には一八九一年一月にノルウェーで初上演されたばかりのヘンリック・イブセン『ヘッダ・ガーブレル』も取り込まれている。イブセンへの傾倒やその作品への尊敬のまなざしが窺え、彼が示す社会的メッセージをフィンランド社会に翻訳する役割もカントは担ったといえるだろう。

カントによる意図的な仕掛けにより、二人のまったくタイプ異なる作家の競演が実現した。アホの作品も発表当時と違う意味合いを持つことになった。男性と女性の、二つのちよつとした日常の冒険の物語から、当時のフィンランド社会の様子、それに対峙するカントのフェミニスト的な視点や姿勢を読み取ることができる。

註

- ¹ 原文は Juhani Aho, *Kootut teokset*, WSOY, 1921 および Juhani Aho *Lastuja I-III*, Good Press, 2023 を参照した。
- ² 原文は Minna Canth, *Lyhyitä kertomuksia 1917-19* (1877-1895) *Saga*, 1919/2019 を参照した。
- ³ フィンランドには、誕生日のほか、名前の日 (*nimipäivä*) を祝う習慣がある。それぞれのファーストネームに日付が割り当てられている。

引用文献

- Juhani Ahon kirjeitä, SKS, 1986. (ユハニ・アホ書簡集)
Niemi, Juhani, Juhani Aho, SKS, 1985
Majjala, Minna (toim.), *Minna Canth: Ihmisen kuvia, Novelleja*,

Gummerus, 2019

Suomalaisen Kirjallisuuden Seura, *Suomen kirjallisuus IV Minna Cantista Eino Leinoon*, Otava, 1965

柴山由理子「解説ーミンナ・カントの作品と時代性」、ミンナ・カント著・真柴奏訳『アンナ・リーサ』葉々社、2025

翻 訳

ユハニ・アホ「帆を乾かす」と

ミンナ・カント「その時、なにが起きていたのか」

フィンランドの二人の作家による「男性」と「女性」の視点からの日常の物語

柴山由理子

Translation of Juhani Aho's *Purjeita Kuivaamassa* (1891) and Minna
Canth's *Mutta Mitäs Tapahtui* (1891)

Stories of men's and women's everyday life in Finland from 19th century

SHIBAYAMA Yuriko